

幼 兒 教 育

第二十一卷
第十二號

大正十年十二月十五日發行

盲兒に幼稚園教育の必要なる所以

東京盲學校長

町 田 則 文

普通の兒童に幼稚園の必要な事は、無論世間一般で充分認めてゐる事であるが、盲兒に幼稚園の必要な事は、世間も等閑にし、殊に盲兒の父母も注意を拂つてないのが常である。之が爲めに、盲兒であるといふ不幸に加ふるに、心身の發育を充分にさせないでゐるといふ事は、盲目の不幸を更に大ならしめて、人間として最大不幸に陥らしめる事になる。

一體、世間では、盲兒に對して幼稚園教育どころか、小學校教育に就いても、等閑にしてゐたのであるが、昨今歐米諸國に於ても、盲人教育の必要を感じ、盲學校を設置し、如何なる盲兒と雖も、皆學校に收容する事になつてゐる。我國の今日の盲人教育とは、日を同じうして話すことが出來ぬ状態である。

外國で早くから盲兒の幼稚園教育の必要を認めて初めて實行したのは、アメリカのマサチューセツ州立盲學校長アナグノス氏（前校長）である。氏が始めて幼稚園を盲兒の爲めに設立したので、これがため、ドイツを始めヨーロッパ各國にある盲學校に、幼稚園幼稚科として、五六歳の兒童を收容して幼稚園教育をする事になつた。そして文明諸國の盲兒は幼稚園教育を受けられないものがない位になつた。

之に反して我國では、幼稚園年齢の盲兒を學校に出す者が絶無と云つてもよろしい状態である。當校などに於ても、頻りと幼稚園兒童を欲しいと思つてゐるが、父兄が盲兒を出さない。昨今やうやく小さい子供が入學して來るやうになり、十歳位の兒童を

一年級として、收容して幼稚園教育と同じ教育をして居る。

今、盲兒の幼稚園教育につき、二三の具體的例を以て述べやう。盲兒はとかく、がら／＼とか、がちやがちやとか云ふ音のする鳴物をよく好むものである。それで母親も音の出る玩具を興へて置けば、子供が喜んでおとなしく遊んでゐるので、安心してゐるが、唯、之だけでは、盲兒は何の知識も觀念も得ないのである。盲兒を持つた母親は、鳴物の玩具をたゞ興へたまゝにして置かず、音の出る絃に觸らせてみるとか子供にするまゝに破壊させ、投げつけさせたりする事が必要である。さうして其の玩具が何處から音が出るか、またどんな風に組立てゝあるかを、盲兒に知らさねばならない。

其他盲兒は、東西南北、左右等のことを云はれても、たゞその言葉の響ばかりを知るもので、眞に東西南北の方向觀念、左右の觀念が發達してゐないものである。故に、例へば教師が手を打つて、「こちらへおいでなさい」、と手の鳴る方に歩かせて見る。又教室に小石を上から落して、「今の石を拾つて来て下さい」と命ずる。「教室の誰さんの前に坐つて下さい」と命ずる。「教室の誰さんの前に坐つて下さい」と命ずる。

い」とか、「教室の左の方から出なさい」、などと、一々動作を實行させて見なければならぬ。さうでないで、言葉ばかりでは、觀念がはつきりせぬのである。

さて、かりに是等の動作を十五六歳の盲兒に向つてなさしめやうとしたならば、いづれも皆馬鹿げた事柄として、好んで實行する者は一人もなく、子供だましの教育をする等と云ふて、大不平を起すのである。さればと言つて、是等の年長兒童は、右の觀念が出來てゐるかと言へば、少しも出來てゐないのである。

然るに、四五歳の盲兒に向つて是等の動作を行はしめれば、彼等の喜びは非常なもので、あだかも普通の幼稚園で嬉々然として喜び遊ぶ兒童と、何等の相違がないのである。盲兒に幼稚園教育を施行せざる時は、觀念開發に最も重要な時期を空しく失ふと云ふ事になる。實に盲兒に對しては、幼稚園教育の必要な事は、普通兒童の比ではない、普通兒童ならばたとへ幼稚園教育を受けずとも、自然と相集つて遊び、或は室内に、屋外に、或は池に、小山に、自ら好んでかけまわる事が出來、その間に知らず／＼觀念が發達するのである。

既にドイツの或所に具體的な、頗る奇抜な一例がある。盲兒を持つた、貧民社會の職工をしてゐる父母が、毎朝工場へ行く時、盲兒に向つて母親が云ふには、「わたしが夕方歸つて来るまで、このお辨當を食べておとなしくお留守居してゐたら、きつと御褒美を買つて來てやる、けれども、室内の器物を一つでもこわしたら、御褒美どころでなく、うんと吐りますよ」と云ひ聞かせる。母親が夕方歸つて見ると、お辨當はよく食べてあるし、室内の器物等一つもこわれてないので、大喜びをして居つた。然し、かう云ふ子供の狀態が、兒童の教育上どんな結果を及ぼしてゐるかといふ事を、不幸にも無教育な勞働者の母親は知らなかつたのである。實は、その盲兒は器物をこわす事を恐れて、室内をはつて歩き、お辨當もねて食べて居つたことがわかり、こんな悪習慣のついた事を發見して大いに驚いたといふ事實がある。もしこれが教育ある母親であつたなら、必ず他の注意を與へ、お辨當はどうして食べるのか、散歩をせよとか、この玩具で遊べとか、貧しいながらも適當な注意をなすであらう。そして子供が器物を少し位こわしたつて、其が子供の精神上の發育を助け

ることになるならば、何とも思はぬようになるであらうと思はれる。

世の中には之に類した事が澤山ある。我が國の下等社會の家庭に於ては、寢て食ふ事、足出して食ふ事等は頓著なく、人の物を貰つたりする事も何とも思はず、甚だしきはお稻荷様などにそなへた物を持つて來て平氣で食べるといふ。普通兒童でさへ、取扱がわるければ、かう云ふ行爲を敢て爲して、完全な發達をせぬ事は明かである。故に我國に於ても、貧民社會などに於ては幼稚園を設けて、母親の不在中は託兒して教育しなければならぬ。之は目下の急務であると思ふ。

盲兒の幼稚園に於て、最も重要な科目は、直感教授、手工科である。直感教授、手工科はすべて手工の練習をさせるもので、盲兒には觸覺の發育に重きを置かねばならぬ。其にはこの科目は缺くべからざるもので、今日歐米各國の盲學校に於ては、普通兒童の小學校よりも一層早く手工科を設置してゐる。手工科でなくては、觸覺を發達せしめる事は不可能である。

又盲兒の言葉は、觀念が明瞭であるのでなくて、

響きから來る言葉ばかりを覺えてゐ易いものである。例へば、「富士山は高くあります」と云つても、富士山の觀念、高いといふ觀念がわからない事が多い。之が普通兒童ならば、この言葉を聞けば、其の意味が明瞭に解るのである。「櫻の花は綺麗だ」、「百合の花は美しい」と云つた所で、盲兒にとつてはいづれもこんなやうな状態である。

この言語の觀念を發達させるといふ事は、幼稚園教育にあらずんば、到底發達させる事は出來ないのである。普通兒童にあつても、教育學の原則として、觀念を先にし言語を後にする、といふ事が唱導されてゐて、幼稚園、小學校の初等教育に於いては熱心に實行されてゐるのである。然るに、若し盲兒にして幼稚園教育を受けてないならば、盲兒は常に言語あつて、觀念なしといふ有様である。大概の盲兒は、觀念と言語を少しも適合させてゐない故に、盲人同志の話は互ひに充分な觀念の交換でないので、殆んど言葉の眞の用をなさぬものである。故に是等の事を完全なるものにしよと云ふのは、いづれにしても幼稚園教育によらねばならぬのである。

また盲人の起居動作はよろしきを得ずして、或は

長者に對して禮をするとか、言葉を交へる時とかは、いづれも當を得ない。腰が高すぎたり、低すぎたり、小さい室で驚くやうな大聲で話したり、講堂のやうな廣い室で聞えぬほどの小言で話したり、また甚だしきは我國には盲人聲と云つて一種の聲があることさへ云はれてゐる。是等はいづれも、人間の最も適當な時期に教育する機會を失つたからである。例へば當校の講堂で毎朝二百名程集つて、體操をしたり、禮をしたりするが、或者は右を向き、或者は禮をせず、二百名ことごとく別々の有様である。子供の時分にかゝる日常の動作に對しての常識教育がない爲めである。人間の身體は四五歳の間に、動作その他の教育を適當にしてなければ、二十歳以上になつてはそんな事は教へても中々効果が無いものである。

以上のやうな事柄は、盲兒に幼稚園教育が缺くべからざるものである事をよく表してゐる。故に幼稚園はます／＼盲人に必要なものである。